

古い名刺

古い名刺 著者・安藤鶴
夫 発行者・岡本経一

発行所・東京都文京区本
郷元町二丁目二 青蛙房

電話・東京（八一三）一

五九七 振替・東京七二

三八四 印刷・三協美術

印刷株式会社 製本・関

川製本所 昭和三十八年

十一月三日 初版発行

定価 四八〇円

古い名刺



藤鶴夫著

古い名刺

目次

I

東京遊覧飛行 九

赤坂新地図 一四

フランス美術展 二〇

楽屋 二六

上野公園 三三

デラックス・プール 三〇

夏の夜の屋上庭園 四三

帝劇 四〇

神田 五二

東京の夏 六九

II

竹の図 七九

三度のめし 八三

ある電話 八四

あめ・はれ 九六

ふるさと 六三

色ざんげ 五五

柱時計の音 二〇九

とんかつ 二二

釜めし	一六〇
学生のうた	一六一
ごきげんな日	一六三
よき宴	一六五
あるじ	一六六
虫聞き	一六八
東京ッ子気質	一七〇
本づくり	一七二
長命寺の桜もち	一七三
うなぎの店・ほか	一七五
会4つ	一七六
マジック・ベレ	一七八
ともだち	一七九
浅草の洋食	一八〇
日本橋・まるたか	一八二

めやみ地蔵	三三
そば	二〇六
製本	二〇五
洋服について	一九九
二子山勝治	一八八
浅草の子	一八七
あたたか	一八六
明治正月	一八五
5時間半開場	一八四
渋谷のひと	一八三
1962年・師走	一八二
親子旅	一八一
みそかそば	一八〇
茶の間	一七九

III

“いき”ということすこし 三六

死者よりの手紙 三六

道化の語 三六

拍子木 三六

江戸ッ子 三六

法悦というもの 三六

太鼓 三六

一冊の本 三六

泥絵具の味 三六

江戸ッ子・東京ッ子 三六

作は秋成・曲は栄寿郎 三六

秋成・其碩・一九・三馬 三六

身にしみる川柳 三六

荷風と演劇 三六

むいかのあやめ 三六

仏前で 三六

“釣堀にて”の夜 三六

古い名刺 三六

あとがき 三六

I

東京遊覧飛行

朝、花火の音で目をさました。

戦後、うちのちかくの須賀神社では、お酉さまの日というと花火を上げるので、寝起きの状態で、おや、もうお酉さまかと思った。気の早いことでは、ひとさまに負けない男だが、これは少しモウロクにちかい。

すぐそばの、学習院初等科の運動会の花火である。

八日（日曜）途中で一度ちょっと晴れ間があったツきり——二日から降りはじめた雨がきれいになって、晴れ。あしたの午後から台風二十四号がおいで下さるという前の日である。

昼すぎ、四谷のうちから、羽田の、えらそうにいうと東京国際空港へ車で向った。これから、東京の空の上を飛ぼうというのだ。

学習院の運動会のさわぎをちらツとみて、権田原へいこうという東宮御所のでまえで、国際タクシーがこっちの車のすぐ前にとまって、わざわざ運転手君が降りてきて、わたしの乗った車のドアが半開きになっていることを注意してくれた。感動した。こんな親切は、このごろ、東京で、

めったにめぐりあえないことなのである。

マヒナ・スターズのヒット・ソング「二人ツきりで話すには、ああもってこいの晩だぜ」というエア・ターミナルは、きょうも乗るひと、送るひと、見学のひとたちでいっぱいである。日本遊覧航空のデッキへ出ると、空はぼんやりダーク・ブルーに沈んで、西の方にちらちら、もう夕焼けのような赤みがさしていて、少し風もある。でも、視界はよろしいそうだ。

ごていねいに、一時間ばかりのあいだに、二度、東京の空の上を飛んだ。

はじめはD・H・ヘロン。乗る前、ロビーでスチュワーデスが「搭乗申込書」を一枚一枚めくりながら、搭乗者の名をたしかめる、鹿児島のAさん、Bさん、秋田のCさん、Dさんといったぐあいである。万が一の場合、この申込書が百万円になる。

客は男女十四人、みんな中年以上の、一見、日焼けした顔でそれとわかるおのぼりさんである。そしてこの東京遊覧飛行は、ほぞの緒切つてはじめての、わたしも完全なるおのぼりさんである。ときどき下をみるにはみたが、それはあとに残して、もっぱらお客を観察した。

スチュワーデスがマイクを口にあてて、いちばん後部のシートから「ただいまより、お空の散歩のご案内をいたします」というと、東京湾に出て、少しずつ機首を上げていった。

船の群れが、長くひろい航跡をひいて動いている。

スチュワーデスが、タバコをのむなといった。二分ばかりして、のんでもいいといった。だれ

も降りるまでのむ者はいなかった。立ってもいいといった。せっかくだが、だれも立つ者はいなかった。みんな二人連れか、それ以上の仲間といっしょなのに、ひそとして声なく、降りるまで、だれも口をきく者がいなかった。十二分で帰った。ランプに降りると、さっきより風が出てきた。こんどはセスナ。パイロットを入れて四人乗りの、自動車でいうと、だいたいスバル360ぐらいのかわいい飛行機である。

同乗は朝日新聞学芸部のM君がパイロットの右、そのうしろの、さっきのステューワーズがわたしのとなり。パタンとドアをしめた。なんともかんたんなドアのしめ方だ。ベルトもない。

さて、こんどは本番である。

わたしはちゃんと空の上から東京をみなければならぬ。

窓のそばへ、びたり、からだをつけられないのはどうしたものであろうか。わたしは、わたしのからだをできるだけ中心をとって、まっすぐ動かないようにし、首だけを、左右に、のぼすようにしていた。もっとも、この自分の状態に気がついたのは、着陸する五分ぐらい前のことだから、だいたい、三十分ぐらいは乗っていたあとの発見である。

頭の上に、大きな翼が屋根になっている。

このごろ、わたしは飛ぶ夢をみなくなった。夢をみることをおぼえて、なん十年かの間、いつもおなじような飛ぶ夢をみていた。ニューヨークの摩天楼の如きひよろ長いビルのいちばん上か

ら、すうと、わたしは飛ぶのである。わたしは鳥が羽根を上下するように、わたしの両手をしきりに動かし、いつも飛び立つときにはひやりとした。なん十年かの間は、少しはげしく手を動かすと上空へ舞い上がったが、そのうち、いくら手を上下させても、いつでも、下へばかり降りていく夢ばかりをみるようになり、ここ四、五年は、ばったり、もうそんな夢もみなくなった。たぶん、次第にじじいになったからであらう。

滑走路をいつか離れて、水の上に出たときには、夢で感じたひやりと、おなじスリルがあった。高度三三〇メートル、秋である。あのどぎつい原色の好きな東京という都会が、こんなにもほんのりと、淡く、美しいカラーの町だとは思わなかった。東京だって、そっくりアルペール・ラモリスの「素晴らしい風船旅行」のカラーなのである。

京浜の工業地帯が褐色と黒とグレー、それがやがて銀座などの豊富な色彩の中心地になり、ところどころに緑がある。宮城、後楽園、赤坂離宮、青山御所、新宿御苑……

しかし、東京で生れて、育って、五十なん年もそこに住んでいながら、東京を空から見ると、なんと、知らないだけである。

方々で運動会をやっていた。マス・ゲームを終わって退場していくと、反対の方から新しくまた入場してくる子どもたちの白と赤の色が、仁丹の粒の大きさだ。綱引きのゲームは、まるで紅白のほそいヒモである。

パイロットに、隅田川を左にみたいとたのんだ。

勝鬃橋はまるで隅田川の鏡前である。この川の曲りくねりの美しさは素晴らしい。いつの間にか曲り、いつの間にかくねっていることが、隅田川の美しさだとはじめて知った。

マツチ箱を横に倒したような松屋、ああ、翼よ、あれが浅草の観音さまだ。

黄色い風船のようなものがいくつか上下している。あ、花屋敷だ。空中観覧者のボックスが、上り降りしているのがみえる。

こんどの戦争で観音さまが焼けて、そして再建したとき、わたしはあの空中観覧車なるものにうちの子どもたちと一緒に乗って、それがいちばん高く上がると、観音さまの屋根と、だいたい目線が一つになることにびっくりし、両手でしっかりとボックスの鉄棒を握ったことを思い出す。その空中観覧車が、いま、ゆるうく、わたしのはるか遠い足もとで動いている。ざまアみやがれである。

学習院の初等科の運動会がみえてきた。けさ、わたしを花火で起した学習院である。ごま粒のようなわが家をさがしたがダメ。すぐ東宮御所の、しんとしずもりかえった新築の一角がみえる。舞いさがって、浩宮さまに敬意を表して、ほっぺにチューをして、わたしはまた舞い上がりたところだが、これは無理な話である。しかし、そんなことも、なんでもなく出来そうな気がするのが、空の上の夢であろうか。池が黒いジュウタンのようにみえた。

東京タワーのまわりを、四度も五度もぐるぐると旋回したのは、わたしの計算にはなかったことである。塔の先端のまわりだから、高度は三三〇メートルか。みると、朝日新聞の天風号あまかぜの窓をあけて、写真部のN君が、わたしの乗っているセスナを空中撮影している。

わたしは手を振りながら、わたしのパイロットに、もういい、などといったりした。

とたんに、ひょいと、このセスナのドアがあきそうな気がした。くる時、車のドアが半開きになつていた連想であろう。

羽田へ——。外野を少し残して、ぎっちり満員の川崎球場では、巨人と大洋がまだ試合をつづけていた。滞空時間三十二分。じつとり、ひたいに汗をかいていた。

なにをかくそう、三階となると、もう足がすくんじゃうという、わたしは高所恐怖症なのであった。

(36・10)

赤坂新地図

清水谷公園。

正面の「贈右大臣大久保哀悼碑」という長方形の大きな碑の上に、夕方のすずめが三羽、ちょ

こんと並んでいた。

明治十一年の五月、ここで参議・大久保利通が兇漢六名に襲われたところである。当時の新聞をみると「兇賊石川県士族島田一郎」などと書いてある。「即時就捕縛候事」というのをみると、なんだか講談のような古風な調子があっっておかしい。

もう遠い話になったが、ここがいま、赤旗を立てたデモ隊の集合地に使われているのが妙である。すぐ前が、国会の地つづきだからだ。

だれもいないと思ったら、左の池の前にアベックがひと組、ひっそりと池をみていた。なにか、くらい感じのする公園である。

広い通りをへだてて、歌舞伎の尾上松緑、新派の水谷八重子、歌のおばさんの松田トシのうちがある。

弁慶橋は東京のいろいろな橋の中で、わたしの好きな橋のひとつだ。蓮のつぼみをかたどったという擬宝珠ぎぼしのついた橋で、擬宝珠は社寺や城門などの格式のある橋にだけ許されたものだときいている。

この堀は江戸城の外堀で、いま残されたわずかな堀のひとつ。

ボートハウスでボートを貸しているが、目下、電車通りの側の護岸工事をしているので、清水谷公園から歩いて、橋の左側の土手に、すすきが夕風に動いているけしきがいい。